

05年マアジ

単位：数量、1000トン、価格、円/kg

年	数 量				価 格										ムロアジ			
	漁獲	養殖	産地	輸 入	消 費 地			消費支出	在 庫	加工	産 輸		消 費 地			消費支出	漁 産	獲 地
					生鮮	冷凍	塩干	生(万円)		塩干	地 入	生鮮	冷凍	塩干	生(円)			
16	254	2	158.0	52.4	51.5	4.2	18.9	1,852	45.1	54.8	136	120	400	260	512	1,770	26	16.3
17	194	3	126.5	44.4	48.4	4.0	17.5	1,717	40.6	53.3	156	121	416	280	535	1,670	22	12.1
%	76	150	80	85	94	94	92	93	90	97	115	101	104	108	104	94	85	74

漁獲量と資源

17年の漁獲量は19万トンに終わり、前年を下回る水準で平成11年以降の平均20-25万トン台をやや下回る低水準であった。

本年は主力の山陰海域、東シナ海とも漁獲低調で水揚げがやや減少し、特に山陰海域での減少が目立っている。

主力の東シナ海及び日本海沿岸で主に漁獲される対馬暖流系群の資源量は、1973～1976年の21万～29万トンから1977～1980年の11万～16万トンに減少した後、増加傾向を示し、1993～1998年には、45万～52万トンの高い水準を維持した。1999年以降はそれよりやや低く、2001年は26万トンまで減少したが、2004年には51万トンで現在の水準としては中位で増加傾向にあるといわれている。

また太平洋系群は1982年以降一貫して増大、特に1990年代中ごろ頂点に達し安定していた。しかし1996年の160千トンを超えて頂点に、加入量の減少により1997年以降資源量は減少に向かった。そして、再度2000年、2001年にはやや増大がみられたものの、2002年以降は約100千トンで推移している。現在資源状況は中水準で減少傾向にある。

以上のように何れも資源水準は中位であるが、親魚量の増加・確保は、資源の安定的確保には極めて重要であるとともに、また当歳魚の漁獲の減少があれば、漁獲量の増加が期待できるとされている。

ムロアジ類

大中型まき網のムロアジ類(マルアジ除く)のCPUEは、1990年を境に増減を繰り返しながら減少傾向にあり、最近5年間でみると漸増傾向にある。大中型まき網によるマルアジのCPUEは2003年以降減少しており、最近5年間でみると横ばいである。また、いずれも水準は低い。鹿児島県主要港での中小型まき網によるムロアジ類(マルアジ、アカアジ、オアカムロ除く)のCPUEは2000年以降、増加傾向にあるが、マルアジは減少、アカアジ、オアカムロは横ばいで、魚種により傾向が異なる。何れにしても、資源状況の回復の兆しはみられておらず低位横ばいの状況が続いており、周年を通じてやや低調な漁獲にとどまっている。

(近年MAX：H2年 10.9万トン)

産地水揚量と価格（４９港）単位：1000トン

海 域 別 水 揚 量				月 別 漁 獲 量				月 別 価 格 推 移			
海域	16年	17年	前年比	月	16年	17年	前年比	月	16年	17年	前年比
東シナ海	76.0	69.1	91	1	7.3	6.8	93	1	154	174	113
山陰	64.5	39.7	62	2	9.5	10.4	109	2	125	110	88
豊後水道	1.4	1.6	110	3	14.2	10.1	71	3	136	141	104
九州東岸	9.1	6.0	66	4	13.1	15.7	120	4	191	126	66
薩南	11.4	1.9	17	5	22.8	17.4	76	5	118	168	142
太平洋	9.0	9.1	101	6	15.0	12.4	83	6	151	190	126
その他日本海	2.2	2.8	124	7	13.5	7.3	54	7	155	259	167
				8	6.5	6.9	107	8	224	236	105
				9	9.3	10.2	110	9	158	155	98
				10	9.4	10.3	109	10	157	129	82
				11	18.5	9.5	52	11	92	116	126
				12	18.8	7.6	40	12	81	138	170
				計	158.1	126.5	80	計	136	156	115

17年のマアジの水揚量は、12.7万トンで前年(15.8万トン)を引続き下回った。

九州西方海域では、春の盛漁期（４～６月）に前年並みの好調さを維持した。しかし、秋口から冬場にかけて特に11,12月の漁獲の伸びがなかったことで、水揚げは前年を下回った。

また、山陰沿岸では春の盛漁期（４～６月）の昨年のような大量漁獲もなく、また秋・冬漁も低調に終わった結果、昨年を大きく下回る水揚げにとどまった。

太平洋側では薩南海域で前年の5分の1程度の水揚げにとどまり、犬吠から東海では前年並みの漁であった。

魚体は、東シナ海では100g以下のアジが30%(前年55%)(70g以下の豆アジは全体の26%前年36%)を占め主体であったが、昨年より魚体の大きいアジの漁獲が多かった。

山陰沿岸では、依然、魚体の大きいマアジは少なく豆アジ（0～1歳魚）主体で推移し、依然型の大きいアジは僅かであった。

価格は、156円で水揚げの減少を反映しく前年（136円）を上回った。

輸 入

17年のアジの輸入は、4.4万トンで5～7万トンの近年の範囲をやや下回る水準で、前年(5.2万トン)を下回った。

本年は、オランダ1.5万トン(前年:1.8万トン)、ノルウェー0.65万トン(前年:0.5万トン)、アイルランド0.3万トン(前年1.2万トン)でノルウェーがやや増加したが、アイルランドの減少が輸入量の減少に直結している。また韓国も0.5万トンで前年(0.5万トン)並みであったが、台湾は0.2万トン前年の0.4万トンを下回っている。

本年は、国内漁がやや低調であったが、輸入もサバと同様の減少傾向がみられた。

価格は、121円でほぼ前年(120円)並みであった。

在 庫 量

本年の在庫量は、4.1万トンと前年(4.5万トン)を下回った。

これは、国内生産量及び輸入量の減少を反映したものである。

消費地入荷量と価格

17年の消費地入荷量（10大都市）は、5.2万トン（生4.8万トン、冷0.4万トン）で前年5.6万トン（生5.2万トン、冷0.4万トン）を下回った。なお、塩干のみは1.8万トンでほぼ前年（1.9万トン）をやや下回った。

今年の1世帯あたりの消費支出は数量・金額とも前年を下回り、購買力も落ちている。

価格は、生416円（前年400円）、冷280円（前年260円）、塩干535円（前年512円）で、何れも単価はアップしている。